

偽ガイド問題に見るモロッコ観光事情

国際観光サービスセンター
専務理事

石井 昭夫



★土産物屋の「営業努力」

「ムッシュウ、後ろから偽ガイドがついてきます」と運転手のアジズが言った。メルセデスの観光ハイヤーをチャーターして南モロッコをひとまわりし、ワルザザードから山越えコースを経て、マラケッシュ市内で昼食をとろうと南郊から接近中のことであった。

数分して赤信号でとまると、バイクの若者が近づいてきてアジズと何か話し始めたが、急に険悪な調子になる。青になって走り初めてから説明してくれたところによると、マラケッシュの土産品店が偽ガイドに無料でバイクを貸し、観光ハイヤーやマイカーがやってくるのを郊外で見張らせ、客引きさせているのだという。無数にある土産物屋としては客に来てもらうための当然の営業努力であり、必要経費というわけだ。

モロッコでは、ガイド免許を持たない運転手が市内をガイドすることは禁じられているから、観光客（つまり私）をガイドさせると言っているのだが、こちらは、マラケッシュの観光は済ませており、今回は市内で昼食をとるだけである。だから、アジズはガイドを断ったのだが、偽ガイドの方はそんなことで諦めては商売にな

らない。

ふたりはどなりあったあと、市の中心のジャマ・エル・フナ広場まできて、ハイヤー用の駐車スペースで、そこらにたむろしていた大勢の見守る中で口論になってしまった。アラビア語なので全然言うことは分からないが、あとで聞いたところによると次のようなことであった。

アジズは「食事をするだけで観光はしない。自分の行きつけのレストランで食べるだけだからガイドを雇う必要がない」と主張した。（それにももちろん相手は偽ガイドでそんなことを主張する権利はない）。

実際にアジズはこれまでの道中、私の要望に応じて、生がきで有名な高級レストランから、街道沿いで地元のモロッコ人が食べるカフェやブラスリー型の本当に安くて旨い店に連れていてくれた。後者はもちろん手を洗って右手だけで食べ、アルコールは一切なしのモロッコの庶民の溜まり場であった。前者の外国人向けの立派なレストランだと1人当たり2,000円から3,000円くらい掛かってしまうのに、後者だと実に2人で400～500円相当で済んでしまう。

アジズとは、4日間の「二人

旅」で気心知れた仲になっていたから、マラケッシュでは、彼のお気に入りの安くて美味しい店に連れていってあげようとしていたのであった。これに対し、偽ガイド君は、そんなことをされては自分たちが食って行けなくなる、土産物店に行かないのなら、レストランに自分が案内する、決まったレストランがあるならそこへ自分が案内すれば、コミッションがもらえるのだからそうさせろ、というのであった。

★偽ガイドは必要悪？

モロッコのガイド問題改善をテーマに、JICAの短期（40日）専門家としてモロッコに派遣されていた私は、この時点ですでに滞在30日になり、偽ガイドも3人ほど経験済みであった。ここまで険悪にならなければ、この偽ガイドをやとって、アジズと3人で食事し、もう少し土産物屋の「必要経費」について取材したいところであった。それに、同じレストランでも、外国人観光客と地元の客では入り口が違い、値段も違うということを経験していたので、その辺の実情も知りたかったから、この成り行きは少々残念であった。

モロッコには現在全国ガイド、ローカル・ガイド、補助ガイドの3種の有資格者が合計1500人ほどいるが、その4倍から5倍の無資格ガイドが活動しているという。観光客の評判ははなはだ悪く、当局が何度も取締りに乗り出すのが、それで掴まるのはビギナーばかりで、大物には事前に情報が流れてつかまらない。万が一掴まってもそこはコネ社会、すぐ出てきてしまう。そもそも、取り締まる警官を含めてみんな顔見知りの間柄だし、だれしも偽ガイドをせいぜい必要悪としか思っていないのだから、そういうしがらみを

全部吹き飛ばすほどのエネルギーがなくては、効果はないであろう。

それに、偽ガイドというわれわれ日本人は大層なことのように思うが、大学を出ても職がなく、仕方なく得意の語学をつかって偽ガイドになったという連中が多い。下手をすると兵士上りの古手のガイドより質のいいのがいくらでもいる。

私が土産物は買わないという条件で付き合いもらった偽ガイドは、メディナ内を丁寧に案内してくれ、「取材」させてくれて120DH(約1,500円)要求しただけだった。それでも、モロッコに住む日本人は法外に高いと言ったが、個人用ガイド付きのメディナ入場料が1,500円だと考えれば安いものである。発展途上国へ行く先進国の観光客は、「地元民と同じローカル価格で財やサービスを買おうとすべきではない」というのが目下の私の考えである。

途上国は、外貨獲得の必要にせまられて、地元の間にはおよそ利用できない高価な施設やサービスを、外国人のために、貴重な物的、人的資源を注ぎ込んで作っているのであるから、外客用と住民用の2重価格が生まれるのは当然なのである。

★物価水準の差が生む甘い蜜

モロッコ観光の最大の魅力は、フェズやマラケッシュを初めとする歴史都市の迷路のようなメディナ(旧市街)とあっていいであろう。モロッコ人でさえ、地元の間以外には目的地にたどりつけないというメディナの散策には、ガイドが欠かせない。そして、ショッピングはメディナの散策と一体であり、ここの構造上、外国人観光客を満載したバスを土産物店に乗り付けるなどということではできな

い相談である。

モロッコに限らず、多くの発展途上国で土産物にからんで多額のコミッションがやりとりされるのは、観光客送り出し国と受入れ国の経済水準の格差により、財・サービスの生産コストと販売価格の間に、5倍から10倍の価格差が簡単に出てしまうからである。問題は誰がその価格差を調整し、かつ、その「差益」を手にするかである。

かつて旧ソ連では、インツーストやドル・ショップをうまく使い、中国は人民元と兌換元を使い別けて、公権力がその役割を果たしていた。管理経済下では差益も外貨も政府が管理できたが、自由経済下ではそうはいかない。

旅行産業界が自由経済の原則に従って「調整」に当たるのだが、モロッコでは、そういう発展途上国に共通の事情のうえにメディナという特殊条件が重なって、意識するとしないに拘らずガイドが調整役の主役を果たし、その差益のかなりの部分を手にしているわけである。

だから、偽ガイドだけが悪いのではなく、正規のガイドも行動は同じであり、団体旅行に雇われるガイドは報酬をもらうどころか、自分の報酬分は旅行業者の取分として提供し、さらに博物館などの観光客の施設入場料まで自分のポケットから払い、そうして仕事を回してもらって土産物店のコミッションで埋め合わせている。ガイドの報酬より、土産物店が払うコミッション(30~50%)の方がはるかに多く、極端な例だが、絨毯を買いまくったさるアメリカ人についたガイドは、一日で200万円相当を稼いだという。

価格差から来る闇の部分をめぐるやりとりは、ガイド問題を越えたテーマであり、モロッコは今、

発展途上国の中の観光先進国として、この問題にどう対応するかを迫られているかにみえる。

★打開策ありや?

ガイド制度の改善というテーマを入り口として、モロッコ観光省の幹部はじめ業界の多くの人達と意見交換する機会を持ったが、ガイドの質の向上や罰則の強化といった方法だけでは真の解決にはならないことは明らかである。外国人観光客にどうすれば合理的に多くの金を落してもらえるかという観点から、新しいシステムを考え出す必要がある。

そのための第一歩は、品質を保証する定価販売を志向することから始めなければならないだろう。物の値段がないということ、あるいは質と価格の関係が不明瞭のままであることが業種の発展を阻害することは、先進国も経済発展の過程で学んできたことである。その上に途上国では、外国人観光客と地元民との経済格差による二重価格構造という難題が重なる。しかし、そうであっても、ここをうまく合理化しないと、発展途上国が観光を自国の経済発展の機動力にすることは難しいのではないだろうか。

観光は、富める国から貧しい国へ自然に富が流れる唯一のチャンネルと言われてきたが、実は「モノ」と同じで、世界観光の果実も、発展途上国の期待を裏切って、ますます先進国に偏って行く傾向を見せている。観光における国際協力は、今ハードもさりながら、ソフトの部分でこそ必要である。発展途上国の観光問題への対応には、送り出し国側の知恵と協力が絶対に必要であり、とくに旅行業の役割が極めて大きいことを痛感させられた40日間であった。